

『不安』について

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

昭和56年9月25日受理

I

『不安』(Suspence, 1896)¹⁾の舞台となっている時代と場所はナポレオンがエルバ島に追放された1814年の冬であり、ウィーンではフランスの今後の運命を決定するウィーン会議が開催され、その成り行きが注目されている頃のイタリアのジェノアである。

当時、イタリアの主要な都市にはオーストリアの軍隊が駐屯していたが、イタリア人の中にはナポレオンをエルバ島から脱出させ、彼の力を借りてイタリアの独立を達成することを熱望している革命的な考え方をする者も多数いた。逆に王政復古によりフランスに帰国したフランス国王や貴族達、更にヨーロッパ各国の旧体制派の人々はそうしたナポレオンを担ぎ出そうとする動きに不安を感じていた。

コンラッドはこうした時代の変わり目の人心の、社会の不安な状態を背景に、人間社会を形成する各階層を代表するような人物、ナポレオンやバーナード (Bernard) のような成り上がり者、あるいは唯物主義者の代表者としてのエリオン伯爵 (Count Helion de Monteverso)、支配者階級と見做されるチャールズ・ラザム (Sir Chrales Latham) や、ドクター・マーテル (Doctor Martel) のような信義を重んずる者の代表者としてのアルマン侯爵 (the Marquis d'Armand)、カンティルシィ (Cantelucci) のように新しい時代を築くためにその夢に生死をかける代表者としてのアッティリオ (Attilio)、時代の流れに翻弄される時代の犠牲者としてのアデール (Adèle)、新たに未知なる世界に歩み出そうとする無知な者の代表者としてのコズモ (Cosmo) を配し、『不安』の世界を展開させるのであるが、彼等、代表者と目される人物達には、それぞれ人生の糧となるべき信念があるように思われる。彼等の生き方を支えているそうした哲学に注目しつつ、『不安』の世界を分析してみたい。

II

フランス革命やナポレオンの台頭後、ヨーロッパ各国に着の身着のままに逃避した旧フランス貴族の娘であるアデールは16才で「成り上がり者」(upstart)とコズモの父、チャールズ・ラザム、に蔑まれるような男、エリオン伯爵と結婚したのであるが、それにはそれなりの理由があった。当時、旧フランス貴族達は長年の国外逃亡生活とフランスに帰国

できる夢がナポレオンの勢力拡大と共に次第に遠のく不安の中にあり、更に経済的にも大変困窮した状態にあった。にもかかわらず、旧フランス貴族達は以前の安楽な生活が忘れられず、積極的に現実に即応する努力を怠り、計画性のない夢のような旧体制の復興に期待をかけつつ、彼等自身の仲間内で互いに中傷しあい時を過ごしているのである。そうした貴族社会の中であって、アデールの父、アルマン侯爵、は国王からの信頼が人一倍厚い故に、他の貴族より数多く国王の使者として個人の財産を消費しながら旧フランス王国と友好関係にあった諸国を訪ねて、旧フランス国王に対する援助を要請していたために、彼の家庭の経済的困窮はひどいものであった。従って母親の生活に対する不安は娘のアデールにも強く感じられていたのである。

“...What I suffered most from was our domestic anxiety; my mother’s fears lest the small resources we had to live on should fail us altogether...”²⁾

この困窮した家庭を救う為には彼女にはエリオン伯爵の求婚を受け入れる以外に道はなかったのであるが、彼女の行為の根底には自分の犠牲が家族の救済に連がるという意識と共に、彼女自身の雅量と自己犠牲の行為を誇示しようとする思い上がった傲慢な態度が見られるのである。16才という年齢を考慮すれば、それも無理からぬことではあるが、エリオン伯爵の求婚を受け入れる旨を一人で告げに行き、エリオン伯爵に彼女の気持を告げる態度は、エリオン伯爵に「自分は生涯妻から愛されることのない男」なのだという屈辱感と共に、逆に彼女に対する嫉妬心と独占欲を増長させただけであり、結局は彼女の不幸の原因ともなっているのである。更にエリオン伯爵と結婚した折には、彼女には飛ぶ鳥を落とす勢いのナポレオンの数年後の没落などは想像することもできなかったであろうし、そんなことを期待している非現実的な旧貴族達を軽蔑していたのである。

“... A class that has been under the ban for years lives on its passions and on prejudices whose growth stifles not only its sagacity but its visions of the reality.”³⁾

“..., but I remember my poor father’s helpless indignations and my own appalled disgust at the things I could not help hearing and seeing.”⁴⁾

“But the world can’t be put back where it was before you and I were born.”⁵⁾

それ故エリオン伯爵の求婚を受け入れることは、生活に困まりながらもプライドだけは高い亡命貴族の現実を認識しない態度に対する彼女の非難であり、新しい経済力を持った階級に対して衰退する貴族階級の屈服を彼女自らが認めざるを得ないと認識した行為であったはずである。彼女には彼女のとった行動こそ現実を正しく認識したものであるという自負と、如何に経済力をもってしても人間の精神まで屈服させえないものであることをエリオン伯爵に認識させようとする驕りがあった。

若気の至りから両親には無断に等しい状況で「成り上がり者」と結婚した彼女の行為に対し亡命貴族達の中傷や嫉妬は彼女も承知していたが、彼女は自分の行為の妥当性を信じていたのである。しかし数年後ナポレオンによって貴族の帰国が許され、次にナポレオンの没落と共に王政復古がなされたことは彼女自身にとって自分が大きな誤ちを犯したのだと認めなくてはならなかったし、又その過ちの原因となった高慢な精神から出た自分の言葉、

“...telling him that I didn't care for him in the least and probably never should; but that if he would secure my parents' future comfort my gratitude would be so great that I could marry him, without reluctance and be his loyal friend and wife for life...”⁶⁾

に忠実に生きなくてはならなくなったのである。何故なら、彼女は王政復古後、何らかの手段によってエリオン伯爵と離婚することも可能であったかもしれないが、そういう行為にできることは自分を裏切ることであり、ナポレオン治政下において陰でナポレオンを罵倒しながら、彼の前では深々と頭を下げるといった卑屈な行為におよんでいた、彼女が最も軽蔑する貴族達と同じ人間に自分を位置づけることを意味するのである。

彼女は余りにも若くして人間の愚かさを眼の当りに見、環境によって変化する人間の精神的弱さを知ってしまったのである。従ってエリオン伯爵との約束に忠実に生きることが、彼女を精神的に脆弱な他の貴族達と区別させる防波堤となっているのである。

She had all her illusions about rectitude destroyed so early that it did not matter to her now what she knew of the people about her.⁷⁾

“... For my part, I go through life without raising any objections to anything. One has to preserve one's dignity in some way; and is there another way open to me? ...”⁸⁾

彼女は人生に夢もなく、己の体面のみを保って生きてはいるが、彼女のそうした生き方が彼女を取り巻く人々に対し如何なる影響を与えていたか？ 父親のアルマン侯爵は娘の結婚を喜んでいるわけでもなく、夫のエリオン伯爵も妻に愛されることもない惨めで孤独な人生を生きているのである。つまり、彼女は自分の体面のためにのみこの孤独な結婚生活を送り、他の人々も彼女と同じ人生に追い込んでいるのである。その原因は、一見、時代に翻弄され、その結果、自我を殺した人生に対する彼女の諦観と思われるが、実は、裏を返せば、自分の失言にいつまでも固執し、問題のより良い解決策を求めようとしない我儘であり傲慢さであったといえるだろう。

III

エリオン伯爵は元はといえばイタリアの名もない皮行商人の息子であったらしい。若い

頃から転々と各国の軍隊を渡り歩いた挙句、莫大な財産を手に入れた男であるが、それ迄の彼の人生を憶測してみると、その経歴からして機を見るに敏であり、動乱する世にあってその実力を発揮し得た人物であるといえる。言い換えれば、彼の過去はすべて曖昧模糊としており、彼の素性の怪しさと財産を手に入れた手段の不当性を匂わすものである。彼の現今の隆盛は過去の彼の狡猾な行動と運の強さに外ならないと言えるだろう。彼の隆盛はナポレオンと同じように動乱する世の潮目に上手く乗り得た結果であり、変革する時代は彼等のような人物を生み、また必要とするのである。彼等こそそれ迄の社会に存在しなかった新しい力であり、時代を動かす原動力となるのである。つまり彼等は無から生じて来たのであり、既成の勢力に取って変わる大衆勢力の台頭を象徴しているのである。そういう意味においてエリオン伯爵の存在は次のように述べられている。

It began also to be whispered that he was a man of fantastic humours and of eccentric whims of the sort that do not pass current in the best society; especially in the case of a man whose rank was dubious and whose wealth was but recently acquired.⁹⁾

What was remarkable about him was that he had managed to get away with his plunder, or at any rate a part of it, considerable enough to enable him to make a figure in the world and marry Adèle d'Armand in England. That was only because of the Revolution. In royal France he would not have had the ghost of a chance; and even as it was, only the odious laxity of London society in accepting rich strangers had given him his opportunity.¹⁰⁾

従って彼は貴族階級の長い歴史と教育から培われてきた立派な家柄とか高貴な人格、教養そして特別な所属階級等は持ち合わせていないのである。それ故に財力を手にした時には、大衆が羨んできたこうしたものをどうしても手に入れたいし、また手に入れることの出来る彼の実力を誇示したいのである。こうした行為は、彼がその代表である新しく台頭する勢力からの遊離であり、取って変わろうとする既成階級の一員に自分を属させる行為なのである。だが、例え外観だけ貴族階級を装っても彼の人間の本質は貴族階級のそれとは程遠いものである。それ故、こうした行為こそチャールズ・ラザムに「成り上がり者」とエリオン伯爵が蔑まれる原因なのである。つまり、エリオン伯爵の俗物根性と財力がその根底で、彼がそれ迄所有していなかったものを手に入れようとする欲望を駆り立てているのである。しかし表面的に一部の不甲斐無い貴族達に彼が受け入れられても、それは彼の財力の続く限りにおいてであり、財力を無くした時の彼が受ける扱いはおよそ見当がつくのである。その例がナポレオンである。彼は貴族階級の帰国を許し、彼等との社交を楽しんではいたが、一旦追放の憂きめに会った時、彼の復帰を期待したのは貴族階級ではなく、大衆であったことはナポレオンの属する階級が何なのかを如実に物語っているのである。

エリオン伯爵と同類と見做されるナポレオンのこうした俗物性はバーナードの言葉によく現われているのである。

It (i. e. Napoleonic greatness) was nothing but the power of lies. “Well then, he (i. e. Napoleon) is of no account.”¹¹⁾

つまり、財力は決してオールマイティーでもなければ、その人間の精神的な高貴さと人間性の豊かさを証明するものではない。しかしエリオン伯爵にはこの厳しい事実が理解されていないのである。あるいは理解しようと努力しないのである。彼はかたくなに財力の魔力を信じているのである。

“There is nothing to compare with wealth,” interrupted the other in a soldierly voice and paused, then continued in the same tone of making a verbal reports “When I was in England I had the privilege to know many people of position. They were very kind to me. They didn’t seem to think lightly of wealth.”¹²⁾

“... Never mind, a man like me can be master under any reign.”¹³⁾

財力によって総てが得られるというエリオン伯爵の信念に反抗しているのは実は彼の妻のアデルなのである。彼女は自分の言葉に忠実に無為な結婚生活を送ってはいるが、彼とアデルの間に子供ができないことは、財力によってエリオン伯爵はアデルを得ることはできても彼女の心と愛を得ることはできないことを暗示しているのであり、延ては真に骨のある貴族達には彼が受入れられないことを示すものである。従って山家育ちの礼儀をわきまえぬ、彼を最も信頼しているクレリア (Clelia) を貴族の男性に嫁がせて、子供を得ることが名実共に貴族達に彼を受け入れさせることを意味するのであり、同時に彼の財力信奉が間違っていないことへの証明ともなるのである。しかし彼がクレリアに示す父親のような愛も、裏を返せば、彼の財力の万能力の証明手段としてクレリアを利用しているに過ぎないのである。

彼は財力によって地位と名誉、そして人の心身までも手に入れられるとする横柄且つ浅薄な考えを抱いているのであり、彼には人の心の微妙な趣を推し測る暖かい感情が欠如しているのである。彼の総ての行動の動機は飽くまで利己的で自己顕示的なものである。その結果、財力から彼が得たものは見せかけだけの地位と名誉と底知れぬ孤独と愛されることも理解されることもない妻に対する嫉妬心と猜疑心であった。

IV

滅びゆく旧支配者階級の代表者ともいえるアルマン侯爵は英国に逃亡した旧フランス王政下の王族や貴族達の時代の流れに適応しない、また適応しようとも努力しない無能さを十分に認識しているのである。

“... He (i. e. the King of Sardinia) is an excellent man but all his ideas and feelings came to a standstill in '98”¹⁴⁾

貴族達の意識の中にあるものはそれ迄国民と国家を導いてきた指導者としての自負ではなく、国家の安定や国民の福祉より貴族階級のかつての特権を優先させるエゴイズムであり、その特権維持のための旧体制への執着だけなのである。彼等のこうしたエゴイズムをアデルは次のように述べている。

“...I too was glad to get away from the evil passions and the hopeless stupidities of all the people that had come back without a single patriotic feeling, without a single new idea in their heads, like merciless spectres out of a grave, hating the world to which they had returned. They had forgotten nothing and learned nothing.”¹⁵⁾

それでもなおアルマン侯爵が王党派のために努力したのは王の彼に対する絶対的な信頼に答えるためであり、少しでもフランス国家に益ならんと願う熱い気持ちに外ならないのである。彼の王と王の支配したフランス国家に対する信義は彼自身の個人的な問題であり、結果の善悪にかかわらず、彼の運命は信義と結びついているのである。すなわち、彼の信義はフランス国家の由って来たり、成立して来た根源と結びついているのである。ただし、彼のフランス国家との結びつきは彼が貴族として生れ育ち、王党派の一員としてフランス国家と国民を指導して来た点にあるのであり、この点を見捨てては考えられない故に、亡び行く階級に属する彼の努力には結果的には屈辱のみが待ち受けているのであるが、彼はあえてその階級からの脱出を彼なりの忠誠心という扉によって自ら塞いでいるのである。

亡び行く階級への忠誠は一見無意味と思われるが、彼のこのような利他的な損得を抜きにした真摯な態度がチャールズ・ラザムやドクター・マーテルの共感を呼ぶのである。チャールズ・ラザムやドクター・マーテル、そしてアルマン侯爵の信義を重んずる態度の根底にあるものは主義主張や身分や社会的地位や財力に対する敬意の念ではなく、社会的状況の変化や個人的理由とは関係なしに彼等が生きなくてはならないと考える利他的な信念に自らの総てをかけて燃焼しようとする人間的魅力への敬意の念なのである。

前述した点においてアルマン侯爵は利己的な余り人間性そのものまでが卑しい印象を与えるエリオン伯爵と大きく異なっているが、アルマン侯爵の忠誠心そのものもある意味では非常に利己的なものといえるかもしれない。何故なら彼の古いフランス国家を維持しようとする愛国心と新しいフランスを誕生させようとする革命家達の愛国心には優劣がないとしても、アルマン侯爵にとっては新しい時代、新しい国家には彼の忠誠を尽くすべき歴史的根拠が存在しなくなるからである。つまり、新体制は旧体制の存在を認めないのであり、そのことは貴族階級の存在も認めないことを意味しているのである。それ故彼には時

代の流れに逆らっても旧態制に固執しなくてはならないし、出来る限り維持させなくてはならないのである。従って表面的には王や国家に対する彼の忠誠心は、逆からいえば、彼の自己存在の根柢を維持するための努力に外ならない。

Though he had abandoned his daughter to an upstart, he was too good a royalist to abandon his principles, for which certainly he would have died if that had been of any use.¹⁶⁾

“I forget! You are still so young,” said the ambassador, recollecting himself. This young man sitting here before him with a friendly smile had his friends amongst his own contemporaries, shared the ideas and the views of his own generation which had grown up since the Revolution, to whom the Revolution was only a historical fact and whose enthusiasms had a strange complexion, for the undisciplined hopes of the young make them reckless in words and sometimes in actions. The Marquis's own generation had been different. It had had no inducement to be reckless. It had been born to a settled order of things.¹⁷⁾

彼は王と国家に対する忠誠の余り家庭を困窮させた原因の主でもあり、引いては娘のアデルをエリオン伯爵との結婚に追いやったのである。しかも彼は不幸な娘の気持と境遇を思いやる心の余裕もないのである。彼は読者に孤軍奮闘する悲劇的な孤高とした古武士を思わせるイメージを与えるが、彼は自らの忠誠心を満足させるために娘や家庭を犠牲にしたのであり、真に悲劇的な犠牲者は家族の者であったことを忘れてはならない。

V

アデル、エリオン伯爵、アルマン侯爵、彼等は自らの信念に基づいて困難な人生を何とか生き抜こうと努力して来たのである。そうした人達の中であって唯一人コズモだけはイギリス人という地理的な好条件に恵まれていたために、揺れ動くヨーロッパ社会の影響を受けることもなく、名門ラザム家の息子として今日迄、何不自由なく生きて来た人間なのである。政情不安なヨーロッパ社会への旅行にしても、それは見聞を広めるためのものであり、召使いを連れての優雅な旅である。彼にはそれまで切実に難局を乗り越えて生きなくてはならないとか、自らの力で人生を切り開かなくてはならないといった経験が一度も無いのである。それは彼が英国の政治体制や彼の生活に何の危機感も抱かなかった証拠なのである。彼はアデルとの話の中で He confessed futher that he had the habit of thinking contradictory about most things¹⁸⁾ となっているが、これは彼が他人から聞く話が彼の経験したことの無い事柄であったり、また類推しえる他の経験がない故に、「そんなことがあるものか」と心の内で反駁して、自分の経験の無さを弁護しようとして

いるのである。つまり、彼はおよそ30年間イギリスの名門ラザム家という温室の中で生きて来たのだが、時間的経過ではなく、経験の無さが温室の外の世界の厳しい生生活動を理解し難いものになっているのである。

このようなコズモに幼なくして英国に亡命し、家庭の経済的困窮を目の当たりに見、16才にして家族のことを考え、あえてエリオン伯爵と結婚せざるを得なかったアデールの苦難やその後の心労など理解出来るはずがないのである。彼にとってアデールの身の上話は物語で読み、芝居で見るような現実感を伴わない遠い世界の出来事のようにしか感じられていないのであり、アデールの話に耳を傾けていても、話よりもアデールの哀愁を帯びた美しさのみ心を動かされているのである。またカンティルシーの宿でのマーテル医師との会話の折にも、彼はマーテル医師の冒険的な話や政治についての話に余り関心を示さず、睡魔に襲われるのである。このことは外界で他の人々がかかわっていた事柄と彼自身が何の関係も持たなかったからであり、ある意味では、彼は世間ずれをしていない人間で、それが彼が持って生まれた性格と相まって非社交的、寡黙な人間にしていると見える。見方によれば、世事にとらわれぬ超然とした態度と人々の目に映るかもしれないが、反面、人生に対する無目的が彼に時間に対する畏怖を感じさせている。

A delicious freshness flowed over Cosmo. It did not bring joy to him, but dismay. Daylight already! It had come too soon. He had had no time yet to decide what to do. He had gone to sleep. A most extraordinary thing! His distress was appeased by the simple thought that there was no need for him to do anything.¹⁹⁾

He had got through the day. Now there was the evening to get through somehow. But when it occurred to him that the evening would be followed by the hours of an endless night, felled by the conflict of shadowy thoughts that haunt the birth of a passion, the desolation of the prospect was so overpowering that he could only meet it with a bitter laugh.²⁰⁾

The doctor took notice of Cosmo's languid attitude and the untouched plate before him.

“The trouble is that you don't seem to have any aim at all. Isn't that it?”

“Yes. I confess,” said Cosmo carelessly. “I think I want a rest.”²¹⁾

つまり彼の人生は白紙のノートのようなものであり、そのノートにはこれ迄彼の手によって何の経験も書き込まれていないのである。しかし人間がいつまでも白紙のまま人生を送ることは不可能に近いことであり、何時か人生の厳しさに触れなくてはならないのである。だが彼のような生きていく糧となる信念を持たぬ人間は異常な経験に晒された時、予備経験がないだけに強烈な影響を受け易いのである。マーテル医師はそうしたコズモの無

垢さについて次のように感じているのである。

The doctor believed that unlikely things happened every day. This view was not the result of inborn credulity but of much acquired of a secret sort. A serious, fastidious, and obviously earnest-minded young man, like Latham, was particularly liable to get into trouble of a grave kind. A manifestation of perfectly innocent sympathy could do it, and even less. An unguarded glance. An unconscious warmth of tone. Confound it! Yet he could not let a young countryman of his, a nice, likable young gentleman, vanish from under his nose without takings some steps.²²⁾

コズモを温室から引っ張り出して真に生きることを意味を教えたのはアッティリオであった。アッティリオがコズモを利用した動機がどうであれ、コズモをオーストリア兵の手から奪い返した動機が私的なものであれ、生命を失う危険に晒され、英国人という特権もラザム家の名声も役には立たぬ状況の中であって、利用されていても果すべき責任感を抱いているコズモには初めて生きることを意味が理解出来たのである。またコズモを救うためのアッティリオの勇敢な行為と常に生命を懸けた激しい生き方に強い影響を受けたのである。彼がこのジェノアで知った人々は自分の意志で自分の人生を生きているのである。ところが彼にはそうしたものが全くないのである。

“You won’t call it your luck,” he pursued. “Well, let us leave it without a name. It is something in you. Your carelessness in following your fantasy, signore, as when you forced your presence on me only two days ago,” he insisted, as if carelessness and fantasy were the compelling instruments of success. His voice was at its lowest as he added: “Your genius makes you true to your will.”

No human being could have been insensible to such words uttered unexpectedly in a tone of secret earnestness. But Cosmo’s inward response was a feeling of profound despondency. He was crushed by their appalling unfitness. For the last twenty-four hours he had been asking himself whether he had a will of his own, and it had seemed to him that he had lost the notion of the real nature of courage. At that very moment while listening to the mysteriously low pitch of Attilio’s voice the thought flashed through his mind that there was something within him that made of him a predestined victim of remorse,²³⁾

つまり彼がした異常な経験は彼の意志によってなされたものではなく、ただ彼がそのような状況に巻き込まれたにすぎないのである。従って彼が自分の行動に納得出来なかったのは、その行為に彼自身の自主的な意志が反映されていなかったためであり、自分の生を生

きていなかったという認識である。それ故、彼があえてアッティリオと共にエルバ島に向かおうとしたのは彼の人生がどのようなものになろうとも、自分の意志と力で自分の人生を生きようとしたからである。彼はラザム家という温室と決別して野に出たのである。

“Your luck, signore, will depart with you, and perhaps ours will follow after.” Cosmo protested against that unreasonable assumption, which was of course an absurdity but nevertheless touched him in one of those sensitive spots which are like a *défaut d'armure* in the battle-harness of various conceits which one wears against one's kind. He considered luck less in a sudden overwhelming conviction of it, in the manner of a man who had crossed the path of a radiating influence, or who had awakened a sleeping and destructive power which would now pursue him to the end of his life.²⁴⁾

VI

サスペンスの世界はこの作品の前に書かれた『放浪者』と比較する時、特に目立つのは誰もが余りにも孤独で、互いに相手を理解しようとする努力のなさである。こうした点はエリオン伯爵家の住人、アルマン侯爵、アデール夫婦の間に何ら相手を理解しようとする努力のなさに如実に現われているのである。つまりアデールは自分の殻に閉じこもって夫のエリオン伯爵を理解しようとせず、一人自分を悲劇的な人物と思い込んでいるし、一方、エリオン伯爵はアデールの冷たい態度に憤怒し、アデールに近づく男性に猜疑心を募らせるのみで、彼女を暖かく包み込む努力もしない。またアルマン侯爵はそうした娘夫婦の生活に対しアドバイスを与える努力もせず、政治のことに頭を痛めているのである。彼等は各々自分だけの世界に生きており、背景となっている歴史的状況や彼等を取り巻く人々の思想、行動、感情と感応しあうこともない。アッティリオとコズモの関係においても、一方的にコズモがアッティリオの行動に引かれ、彼の雄弁に対し彼の考えを主張するところはないのである。

逆説的に考えれば、エリオン伯爵家の三人は当時のヨーロッパ社会の不安と思想的分裂、すなわち、ナポレオン派、王党派、無関心派の三派を代表する人々の集まりであると考えられる。彼等がお互いに腹を割って相手と理解しあう努力を怠っていることは増々社会を混乱と対立に陥し入れるだけのことである。人は自らの信念に生きることは決して非難されるべきことではないが、『放浪者』において極端な過激主義者、狂信者というものは社会に対して貢献するのではなく、むしろ社会不安をかき立てるものであると論じた如く、己の世界のみに埋没することは一種の狂信である。しかも彼等の自己犠牲は彼等独自の世界に対する自己犠牲であって、ペロールのような他の人々の為の、フランス国家の為の大きな非個人的な自己犠牲ではないのである。その意味において、完結していない『不安』

には救いがない。すなわち、不安の舞台はナポレオン派，王党派を中心として陰謀の渦巻く世界であり，一見，乱れた蜘蛛の巣のようであるが，それは登場人物を囲む社会であって，中心をなす登場人物間には何らの意志疎通がないのであるから，単なる相入れぬ異質の個体が寄り集まって形成している単純な世界といえる。

コンラッドがこの反応しあうことのない異質の個体の集合体をどのように有機的に結合しようとしたのかは知る由もないが，およそ 300 頁にわたって反応しあう糸口すら見せなかった個々の世界が有機的に結合しあうことはほぼ不可能であり，何らかの反応が現われるとすれば，それはより強い拒否反応であり，崩壊現象であろう。

『不安』の世界はそうした現象に進む直前の世界である。

Notes

- 1) Joseph Conrad, *Suspence* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1968)
- 2) *Ibid.*, p. 131
- 3) *Ibid.*, p. 105
- 4) *Ibid.*, p. 131
- 5) *Ibid.*, p. 149
- 6) *Ibid.*, p. 134
- 7) *Ibid.*, p. 148
- 8) *Ibid.*, p. 150
- 9) *Ibid.*, p. 31
- 10) *Ibid.*, p. 124
- 11) *Ibid.*, p. 26
- 12) *Ibid.*, pp. 124-125
- 13) *Ibid.*, p. 163
- 14) *Ibid.*, p. 108
- 15) *Ibid.*, p. 149
- 16) *Ibid.*, p. 37
- 17) *Ibid.*, pp. 98-99
- 18) *Ibid.*, p. 91
- 19) *Ibid.*, p. 176
- 20) *Ibid.*, pp. 189-190
- 21) *Ibid.*, p. 192
- 22) *Ibid.*, p. 205
- 23) *Ibid.*, pp. 265-266
- 24) *Ibid.*, p. 265

On Suspense

Toshihiko UEKI

*Department of General Education,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 25, 1981)

Each character in *Suspence* has his own belief which he should live up to. It is good to live up to his belief, but when it becomes too egoistic without considering other's feeling, anxiety and thought, what result does it produce? I want to bring into focus on his belief, analyse it and investigate what result will be produced from the frictions of egoistic self and belief.